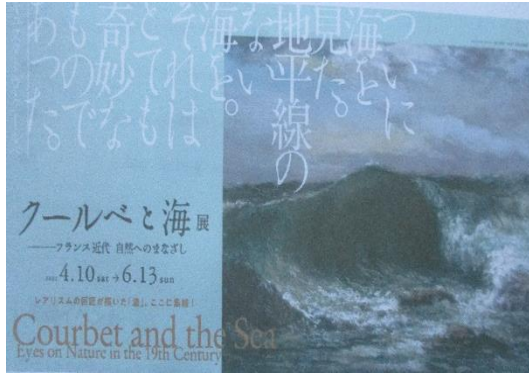


クールベと海 展 —フランス近代 自然へのまなざし

パナソニック汐留美術館 2021.04.10～06.13



「ギュスター・クールベ」(1819～1877)は、フランスを代表するレアリズム(リアリズム：現実主義)で、できるかぎり実物そっくりに、美しくもなく醜くもなく、そのままの姿を描いた画家である。

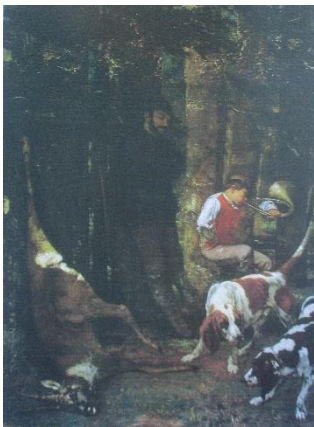
また、故郷の大自然や動物やノルマンディー海を繰り返し描き、その鋭い洞察力や高い技術力が評価されている。

《波》1870年頃 油彩/カンヴァス 上図

本作は、エトルタの嵐の海を描いたもので、奇をてらわぬ構図で真正面から「海」の存在そのものに肉薄して、パレット・ナイフを用いて厚く塗り上げる技法は、波の瞬間は画面の半分を荒れる海を占め、ダイナミックに表現された大波のうねりで、カンヴァスの枠を超えて手前に迫ってくるようである。

黒い青緑色をした海と灰色がかった茜色の空という色彩対比、さらに鉛筆とペインティングナイフによる質感の描き分けなど、簡潔な構図でありながら優れた独自の技量が伺えると評価されている。

《狩りの獲物》1856年 油彩/カンヴァス



画伯は、フランス・コンテやドイツに頻りに滞在した折に、好んで狩猟に出かけた趣味があり、彼の「狩猟絵画」は特異のジャンルのひとつとされている。

この趣味は、その後の彼の芸術の主題となって、かつて例を見ない成果を生み出すことになる。

本作品は、猟師、牡鹿、雌鹿、ノロ、馬、犬、狐に雪景色などを描いた長い「動物画シリーズ」の最初の作品で、陽光を受けた岩山を背景に、2匹の愛らしい「鹿」とこれを物陰で窺う「猟師」との間の緊張感が

あり、情感に溢れた自然描写と一体となって描かれている。

他に、画伯にはノルマンディー海岸を描いた《エトルタ海岸 夕日》や《嵐のあとのエトルタの断崖》などの作品があるが、彼の「断崖」は空と海の間立体性を主張する堅固な建造物であり、絵具材質を生かした描法によって物質的な厚みが力強く再現されていることが特徴であるとされている。